



2018年度理事会・総会

講演要約 「スイスから見たEU」

ネスレ日本(株)専務執行役員チーフ・Eコマース・オフィサー ゲンター・スピース氏

活動報告

- アルベルゴ・ディフーズ フォーラム in 岡山
講演要約 「アルベルゴ・ディフーズ～新しいかたちの分散型ホテル～」
イタリア・アルベルゴ・ディフーズ協会会長 ジャンカルロ・ダッラーラ氏
- 第19回 EU 講座 「16世紀から21世紀へ『ヴェニス商人』が伝えるもの」
- 第20回 EU 講座 「10年後の街を実験する
—ヨーロッパの事例から考察する、都市とアートの可能性」
- 第21回 EU 講座 「仕事は人生の中心じゃない？オランダ流の働き方・暮らし方」

コラム 「ヨーロッパ人にとってのバカンスとは」……白神三津恵

2018年度理事会・総会

「経済・文化講座」など事業計画承認 ネスレ日本・スペース専務の講演も

岡山EU協会の2018年度理事会・総会が6月6日（水）、岡山市中区の岡山プラザホテルで開かれ、事業計画や予算などが決まった。

理事会の後、開催された総会には、会員96人（委任状を含む）が出席。松田久会長があいさつし、議事に入った。

2017年度の事業報告、収支計算などについて、羽田浩事務局長が1年間の活動状況を説明。3回の「EU講座」開催や、ホームページの充実、会員の増強活動、EUとの友好促進事業などについて振り返った。これを受けて岡崎彬監事が会計監査報告し、拍手で承認された。

2018年度の事業計画、収支予算についても審議し、事務局側がEU講座を複数回開くことや、特別講座を企画することなどを紹介。2019年の創立10周年をにらんで活動を活性化させていくとアピールし、満場一致で承認された。

総会後には、ネスレ日本(株)専務執行役員のグンター・スペース氏が「スイスから見たEU」と題して記念講演。EUに加わらず、独自の道を歩むスイスの歴史や社会状況、周辺諸国との関係などを流ちょうな日本語で語り、会員と意見交換した。

スペース氏が加わった懇親会も開催され、会員はEUの将来像などについて話し合った。



総会に先立って開かれた理事会



議長の松田久会長



総会の様子



盛り上がった懇親会の様子

〔第1号議案〕

2017年度 事業報告

1、欧州の経済・文化事情についての勉強会「EU 講座」を3回開催

勉強会「EU 講座」を3回開催した。5月26日には、倉敷市の吉井旅館で、玉島信用金庫の宅和博彦常勤理事(現副理事長)が「労働者の理想郷クレスピダッタと倉敷」と題して講演した。10月20日には、岡山プラザホテルで、岡山商科大学の松浦美佐子准教授が「16世紀から21世紀へ『ヴェニス』の商人」が伝えるもの」の演題で講演。今年1月16日には、岡山市北区のイタリアンレストランで、アーティストの中澤大輔氏が「10年後の街を実験する—ヨーロッパの事例から考察する、都市とアートの可能性」と題して話し、いずれも会員に感銘を与えた。

2、「EU Letter」の継続発行

年1回発行しており、9月に第9号を出した。6月理事会・総会での決定事項、総会の記念講演の要旨、会合の様子などを紹介した。

3、岡山 EU 協会のホームページの充実

岡山 EU 協会内外への情報発信強化を目指し、協会の概要な

どを常時掲載し、理事会・総会、EU 講座の開催日のお知らせなどをイベントカレンダーとして掲載、その結果をイベントレポートとして報告している。他の EU 協会ともリンクを張り、それぞれの活動状況が分かるようにしている。

4、会員の増強を図る

2017年4月は法人63、個人52でスタートし、2018年3月末でも法人63、個人52となった。途中、複数の入退会があったが、前期の水準は維持した。今後も入会の声掛けに努め、会員の増強を図る。

5、EU との友好促進事業の実施

出張授業「EU があなたの学校にやってくる」の参加を会員高校へ呼び掛けたり、ゲーザ・フォン・ハプスブルク大公を岡山に招いて3月3日に開かれた就実大学経営学部のグローバル・フォーラムを後援して来場を呼び掛けるなど、EU への友好と理解を促す活動に努めた。

〔第2号議案〕

2017年度 収支計算書

(2017. 4. 1 ~ 2018. 3. 31)

収支決算

収入総額	¥3,344,665
支出総額	¥1,663,171
差引残高	¥1,681,494 (2018年度に繰り越し)

収入の部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
年会費収入	¥1,600,000	¥1,535,000	¥-65,000	法人会費 @20,000×64、個人会費 @5,000×51
参加会費	¥750,000	¥499,000	¥-251,000	総会 @7,000×22=154,000円 第18回 EU 講座 @8,000×16=128,000円 第19回 EU 講座 @7,000×9=63,000円 第20回 EU 講座 @7,000×22人=154,000円
事業収入	¥0	¥0	¥0	
その他雑収入	¥50	¥14	¥-36	普通預金利息収入
前年度繰越金	¥1,310,651	¥1,310,651	¥0	
合計	¥3,660,701	¥3,344,665	¥-316,036	

支出の部

科目	予算額	決算額	差引額	摘要
総会費	¥1,000,000	¥612,884	¥-387,116	・6/15総会 会場・懇親会 430,043円 ・講師 講演料手土産 149,430円 ・懇親会 BGM 演奏費用 33,411円
事業費	¥1,000,000	¥885,070	¥-114,930	・第18回 EU 講座費用 5/26 399,103円 ・第19回 EU 講座費用 10/20 192,017円 ・第20回 EU 講座費用 1/16 293,950円
広報費	¥170,000	¥95,308	¥-74,692	・ホームページ維持費用 5,884円 ・会報 (EU Letter) 9号発行 89,424円
事務諸費	¥100,000	¥69,909	¥-30,091	・通信費 51,682円 ・消耗品費 17,903円 ・出張旅費 0円 ・その他雑費 324円
予備費	¥50,000	¥0	¥-50,000	
合計	¥2,320,000	¥1,663,171	¥-656,829	

会計監査報告

2017年度の会計について監査を執行し、収入・支出ともに正確に記帳整理されており、帳簿・証拠書類の保管は完全であることを認める。

2018年5月30日

監事 岡崎 彬 
 監事 吉澤 威人 

〔第3号議案〕 **役員選任の件**

新任 理事 (一社)岡山経済同友会 代表幹事 宮長 雅人
 交代 理事 大学コンソーシアム岡山 会長 榎野 博史
 理事 山陽放送(株) 代表取締役社長 桑田 茂
 監事 岡山県商工会連合会 会長 金谷 征正

〈参考〉

2018年度役員

名誉会長	岡山経済同友会顧問	越宗 孝昌	理事	岡山経済同友会代表幹事	宮長 雅人
会長	岡山経済同友会顧問	松田 久	理事	岡山経済同友会常任幹事	古市 大藏
副会長	駐日欧州連合代表部広報部長	フリオ・アリアス	理事	岡山県中小企業団体中央会会長	晝田 眞三
副会長	岡山大学学長	榎野 博史	理事	大学コンソーシアム岡山会長	榎野 博史
副会長	岡山県国際経済交流協会会長	宮長 雅人	理事	岡山県文化連盟会長	若林 昭吾
副会長	岡山県経営者協会会長	野崎 泰彦	理事	福武教育文化振興財団代表理事・理事長	松浦 俊明
顧問	岡山県知事	伊原木隆太	理事	岡山市長	大森 雅夫
顧問	駐日欧州連合代表部大使		理事	倉敷市長	伊東 香織
	ヴィオレル・イステイチョアエア・ブドウラ		理事	山陽新聞社社長	松田 正己
理事	岡山経済同友会顧問	萩原 邦章	理事	山陽放送社長	桑田 茂
理事	岡山経済同友会顧問	泉 史博	理事	岡山放送社長	中静敬一郎
理事	岡山経済同友会顧問	中島 基善	理事	テレビせとうち会長	川端 英男
理事	岡山県経済団体連絡協議会座長	中島 博	監事	岡山県商工会議所連合会会長	岡崎 彬
理事	岡山経済同友会代表幹事	松田 正己	監事	岡山県商工会連合会会長	金谷 征正

〔第4号議案〕 **2018年度 事業計画**

- 1、欧州の経済・文化を深く知るため「EU講座」を複数回開催する
- 2、会報「EU Letter」を継続発行する
- 3、岡山EU協会のホームページの充実を図る
- 4、会員の増強を目指す
- 5、EUとの友好促進事業を実施・共催・後援する

〔第5号議案〕 **2018年度 収支予算書**

(2018年4月1日～2019年3月31日)

収入の部

科目	2017実績	2018予算	差引額	摘要
年会費収入	¥1,535,000	¥1,605,000	¥70,000	@20,000×66 (3法人増強) @5,000×57 (5人増強)
参加会費	¥499,000	¥750,000	¥251,000	総会参加会費 @7,000×30 EU講座参加会費 (3回開催予定)
事業収入	¥0	¥0	¥0	EUフィルムデーズ等事業の開催予定なし
その他雑収入	¥14	¥20	¥6	預金利息
前年度繰越金	¥1,310,651	¥1,681,494	¥370,843	
合計	¥3,344,665	¥4,036,514	¥691,849	

支出の部

科目	2017実績	2018予算	差引額	摘要
総会費	¥612,884	¥1,000,000	¥387,116	総会費用 (会場、懇親会、講師謝礼等)
事業費	¥885,070	¥1,000,000	¥114,930	EU講座・特別講座等費用 約250,000円×4回
広報費	¥95,308	¥170,000	¥74,692	会報発行、HP維持更新費用
事務諸費	¥69,909	¥100,000	¥30,091	通信費、出張旅費、消耗品費
予備費	¥0	¥100,000	¥100,000	
次年度繰越	¥1,681,494	¥1,666,514	¥-14,980	
合計	¥3,344,665	¥4,036,514	¥691,849	

講演要約

スイスから見たEU

(6月6日 岡山EU協会総会 岡山プラザホテル)

講師 ネスレ日本(株)専務執行役員チーフ・Eコマース・オフィサー **グンター・スピース** 氏講師 **グンター・スピース** 氏のプロフィール

1968年2月生まれ。南カリフォルニア大学卒業。96年ネスレS Aースイスに入社。翌年ネスレ日本営業本部東京支店に赴任、2001年同チルド製品部マーケティング本部長、04年NESTLEレバノン・ゼネラルマネジャー、15年ネスレ日本常務執行役員・Eコマース本部長、16年から現職。趣味はスキー、ハイキング、読書。



はじめに

私は日本生まれで横浜育ちです。父親は1948年にチューリヒに本社があるシibelヘグナー・ホールディング・リミテッド（現DKSHジャパン(株)）の日本勤務のために来日しました。スイスのフリゴール社出身の母親と日本で出会い、93年に引退するまで41年間、日本で暮らしました。スイス人同士で最も長く日本に暮らした夫婦です。父親はスイス大使館の設立にも尽力しました。私は92年に大学を卒業し語学力を買われ、日本の東芝EMIで3年ほど働きました。その後チューリヒの大学院在学中にネスレS Aースイスのプロジェクトに参加、英国、フランス、ドイツに赴任、その後日本、ドバイ、マレーシア、レバノン（ベイルート）、ケニア、日本に赴任しました。妻はチェコ生まれのオーストラリア人、私は日本生まれのスイス人、子供はレバノン生まれ2人、ケニア生まれ1人、日本生まれが1人です。

スイスをどう見るか

スイスのmatterホルン麓の村ツェルマットを走るmatterホルン・ゴットアルド鉄道は日本の富士急行と姉妹鉄道協定を結んでいます。

スイスをどう見るのかを、一般的なスイス人の意見と、私のように外からスイスを見る者の見方を比較してお話いたします。

スイスは1291年に建国し、730年以上の歴史があります。欧州はハプスブルク家が台頭しましたが、国王ルドルフが亡くなり、三つの街のウーリ、ウンターヴァ

ルデン（現在のオブヴァルデンとニドヴァルデン）、シュヴィーツが独立しました。シュヴィーツの名前をとってスイスが誕生しました。元は三つの小さな村だった訳です。三つの村の中心に湖があります。当時は国王不在だったため、三つの村の建国は意に介されませんでした。

しかし、その後シュヴィーツ周辺の村が合併しはじめ、チューリヒ以東に始まり、1815年にジュネーブが合併して今の形になりました。王政のない国の建国は欧州では初めてで、建国当初から民主主義による政治が行われました。これにより、民主主義の発祥は米国ではなく、スイスだと自負しています。これは第一のスイスの強みです。

公用語は、ドイツ語（45%）、フランス語（30%）、イタリア語（18~20%）、ロマンシュ語（5~7%）の四つの言語が使われています（ラテン語を使う街がアルプスの上に2箇所あります）。四つの公用語が使われている国はスイスだけで、第二の強みになっています。

国の意思は国民が決める

スイスに大統領がいることは、あまり知られていません。理由は権力がないからです。周辺地域から1人1年の持ち回りで担当します。大統領の仕事は、外国の要人との握手や国民が選挙で選択したことを実行することのみです。

なぜなら、国の意思決定は、全て国民選挙で決められるからです。大統領は自分で意思決定することでは

きません。国民自身が5万人の署名を集めると、全国選挙でこれについて賛否を問います。このように国民は力を持っています。航空機の購入反対も署名を集めて実現されました。

こうした仕組みはスイスのみです。真の民主主義の表れです。さらにアッペンツェル準州では昔の選挙方法で、挙手による意思決定が行われています。700年前から続く特別な選挙です。

戦争がなかったスイス

スイスは戦争がありませんでした。これに対して、隣国チェコは参戦していないのに侵略されています。スイスが侵略されなかったのは軍隊が強いからです。20歳になると兵役が16週間あります（大学生は上官になる訓練を6週間します）。他国と違うところは、マシンガンを自宅に持ち帰り35歳まで毎年3週間、兵役が課されていることです。国を守るために、強い軍隊が必要だったことが背景で、戦争が起きたら1時間以内に50万人以上の兵隊を集めることができます。加えて、南はアルプス山脈があるため、北部を守るだけではないことも奏功したのでしょうか。

こうした仕組みもあり、500年前からバチカンの兵士はすべてスイス人が引き受けています。18世紀までスイス人は他の軍隊に入ってお金を稼いでいました。つまり他国の戦争を肩代わりしていたことになります。

スイスに本社置く背景は

ネスレとロレックスはスイスの象徴です。しかし創業者のヘンリー・ネスレはドイツ人で、ロレックスは

英国のメーカーです。さらに他国の銀行なども本社を置くようになりました。背景には、スイスは欧州の真ん中で地理的優位性もあり、建国以来ほとんど戦争がなく、民主主義が根付いていたことがありました。スイスで工場や会社つくと、平和で安全だから倒産しないと考える企業家が多くいたからでしょう。このように資本の流入があり、裕福な国になっていったのです。

スイスの未来は

欧州連合（EU）は、一つの経済をつくろうという発想です。多くの人があるほど経済が強くなるという考えです。ただし、米国は全て英語の共通言語ですが、EUは多言語です。EUは欧州人が多言語でも、ともにやろうという試みですが、既にスイスは700年前に実現しています。いまEU各国は「スイスになろう」としているようなものです。

ところが、スイスは中心にならず、EUに入っていません。国民はEUに入りたくないと考えています。この理由は独自性の問題にあります。

EU加盟国でも、フランスではフランス語を、ドイツではドイツ語を話します。しかし、もし多言語のスイスがEUに加盟したら、チューリヒはドイツの一都市になるだけです。ジュネーブは美しいフランスの都市になってしまいます。チューリヒのトップの企業で仕事をしているのはドイツ人です。イタリア付近も裕福なイタリア人が、レマン湖付近も裕福なフランス人が所有している不動産が目立ちます。

つまりEUに入ったら、独自性は無くなる上に20~30



記念講演するグンター・スピース氏

年経てば国も無くなるでしょう。これは大変怖いことです。

もう一つの理由は、EU諸国の大統領の言及を信用していないところがあります。大統領や大使館などの政府関係者はEU加盟を望んでいます。加盟することで政府は力を得ることができるからです。92年以降に加盟を問う選挙が行われていますが、スイス国民の意思はノーです。

観光立国スイス

ではスイスの生き残りの道は何でしょう。今は税金や人件費の関係で、スイスに本社を置くメリットはかつてほどありません。ネスレもスペインに500人規模の会社をつくるなど海外移転しています。今のスイス人の悩み事です。

そこで、これからは観光で国を支えていくことになるでしょう。例えばスイスの高級リゾートのスキー場には外国人のみが滞在します。1日スキーを楽しむには1万円前後必要で、スイス人は高額で滑ることすらできません。スイス人にとって、マッターホルンは「観光の国」であり、スイスではないという感覚です。賛否両論があるでしょうけれども、他の道はないと思います。

加盟しないデメリットも

EUに加盟しないことのデメリットもあります。例えばフランス産のシャンパーニュ地方原産のシャンパンは名前を独占できますが、スイスのグリユイエールチーズはEUで認められず、名前を独占することはできませんでした。ネスレのネスプレッソのカプセル(カートリッジのコーヒー)も認められませんでした。これはEUに加盟しないスイスの弱いところです。スイスフランも強く、観光も良く、豊かではあるけれども、以上のようなデメリットもあります。「入るより独立した方がいい」のが国民感情です。

ネスレが世界で認められたのは

欧州の小国スイスのネスレが、従業員30万人以上、世界をリードする栄養、健康、ウェルネス企業に成長できたのは、なぜでしょう。ドイツ人のヘンリー・ネスレは、初め子供用の乳製品(離乳食)を作っていました。現在3,000種類のブランドがあります。

主な取引先は、米国、欧州、アジアです。アフリカや日本もあります。まずスイスに工場をつくったお陰

で牛乳工場を存続することができました。19世紀から20世紀に、スイス人250万人程度の国内販売のみでは不十分で、仕方なくスイス以外で販売しました。ネスレの優れたところは当時、国内に留まらず、積極的に海外で展開したことです。マギー、ネスカフェなどお馴染みのブランドです。

ネスカフェの技術は、スウェーデンの技術を1916年に買収し、牛乳をパウダー化しました。その後、第一次世界大戦終結後、ブラジルでコーヒー豆が余ったことから、牛乳のテクノロジーをコーヒーに応用しました。

1913年に創業したネスレ日本は、関東大震災で神戸に本社を移し、第二次世界大戦後ネスカフェに力を入れました。同社の高岡社長は「課題の解決こそがネスレの取り組みの原点だ」と指摘しています。母乳育児ができない母親のための離乳食をつくり、ネスカフェはコーヒー豆余りの問題を解決しました。マギーはインスタントの技術を応用し、持ち運びが容易で、簡単にすぐ作れるスープを開発しました。

生き残りをかけ変革も

スイスに居たから守られたし、スイスが小国だから外へ出ました。では未来はどうなるのでしょうか。スイスエアーも潰れてしまいました。EUの影響や米国同時多発テロがあったことも否めないでしょう。ネスレは生き残れるのか。

さまざまな国でネスレはパイオニアでした。ベイルートでは家族の買い物の8%を占めています。2006年6週間イスラエルとの戦闘がありましたが、ネスレは撤退せずに残りました。社員を雇用し続け、牛乳も供給し続けました。こうしたことから、レバノンでは戦争があってもクビにされないという評価されていました。しかし3週間目にトラックを止めましたが、何があっても商売をやめないのはネスレだけでした。アフリカのコンゴなど、どこに行ってもネスレ製品があります。

しかし外部の社長が初就任し、ネスレが変わるところもあるでしょう。変革が必要です。スイスも変わらねばなりません。次の目標は、直接商売でサービスを提供する“スイスクオリティー”のサービスビジネスが隆盛になってきています。これは、ものだけではなくサービスを売るというものです。

質疑応答

Q1 松田久岡山EU協会会長 スイスでは、議員はいないのでしょうか。

A1 スピース氏 5万人の署名で発議し、議員は議決をしなければなりません。例えば酒・タバコに年齢の下限がありません。EUから未成年禁酒禁煙のルールを求められますが、親が決めることを国民が求め、ルールをつくることを拒みます。議員も相対的に弱いのです。しかしEUから強制されることもあります。スイスのローザンヌでは60%が外国人ですが、移民を取るべきだと要求されます。3年前に国民が移民阻止の法律をつくりましたが、効力を発揮しませんでした。

Q2 松田会長 「サービスを売る」とは、具体的にどのようなことを指すのでしょうか。

A2 スピース氏 かつて、高い技術で輸出を効率的に伸ばしてきましたが、今日では特別な技術ではなくなりました。海外なら90~50%安く作ることができる国もあります。そこで、商品以外の価値が求められるようになりました。

例えばコーヒーをスプーンで入れず、マシンでつく

る技術が2002年にできました。最初は必要性を感じなかったマシンですが、今では年間700万台以上供給されています。瓶から取り出さなくていいし、お湯を沸かさなくてもいい。より容易なやり方で、綺麗で、味わい深く、便利だから、700万台販売できました。ただし、マシンを作る会社でないと、消費者にプレゼントをしています。一生飲めるような仕組みの導入が目的です。定期購入、Eコマース（電子商取引）も実現できました。

コーヒーを飲む時は、起床時に加えて、ゆっくりする、ミーティング時などが挙げられます。人と人をつなぐ場所でニーズがあります。今後もコーヒー事業は発展しています。それ以外の戦略も模索しています。

Q3 藤木茂彦氏 EUとの関係に関心を持ちました。EUに加盟しない方針が大勢を占めるのでしょうか。

A3 スピース氏 スイス航空が倒産した90年代で当時、投票でEU加盟賛成49%まで上昇しました。しかしスイスフランが強く、経済が強ければEUに入らなくても問題はありません。チェコは政治家の判断で、EUに入りましたが、ユーロには入りませんでした。



アルベルゴ・ディフーズ フォーラム in 岡山

古民家を分散型ホテルに
岡山でイタリアの提唱者招きフォーラム

10月には中国も加わる見通しだ。世界7カ国が加盟して国内63、世界281町村あるが、日本と同じく美しい村の存続自体が課題だ。私は32年イタリアに住みダッラーラ先生と知り合ったが、矢掛町が認定を受け、岡山がアルベルゴ・ディフーズの“首都”となって、岡山発信で全国に広がることを期待する」と述べた。

講演に立ったダッラーラ氏は“アルベルゴ・ディフーズ”の意味について「廃村の危機にあったイタリアの小さな村々に再び息吹を呼

び戻そうと伝統集落の再生を目指して1980年代に提唱した試みであり、今では多くの町で宿泊施設やレストランに再興している。ただ商売や金もうけを目的とするのではなく、オーナー独自の温かいもてなしと現地の人たちとの触れ合い、飾らない日常の共有が魅力になっていることだ」と述べた。

さらに「何も新しいホテルを作るわけではなく、あるもののよさを再認識することに始まり“持続可能なツーリズム”を通じた集落再生の取り組みこそが、アルベルゴ・ディフーズ活動の精神になっている」と強調した。

岡山県下では初めて本格的に聞く話であり、参加した人たちも認定を受けた矢掛町の古い町並みを思い浮かべながら、ダッラーラ氏の考えに共感していた。



ジャンカルロ・ダッラーラ氏

岡山EU協会は6月13日(水)、岡山市北区駅元町のANAクラウンプラザホテル岡山で講演会「アルベルゴ・ディフーズ フォーラム in 岡山～新しい私たちの分散型ホテル～」を開いた。

これは廃村危機にあつた古民家や空き家を新しい形の分散型ホテルに呼び起こそうと提唱したイタリアのジャンカルロ・ダッラーラ氏を招いて開いたもので、岡山県矢掛町が国内で初めて認定されたことを受けて行われた。

会場には同協会や岡山経済同友会会員、行政、教育関係者、留学生ら約150人が参加、松田会長が「矢掛町が初の認定を受けたことはぴったりと思う。イタリアの疲弊した村や過疎・高齢化した村がダッラーラさんの考えを大きな武器として、どのようにして再興していくかをよく勉強し、多くの人たちに広げていきたいと思う」とあいさつした。

またNPO法人「日本で最も美しい村」連合常務理事の長谷川昭憲氏は「本連合は13年前の2005年10月に日本でスタートしたが、世界連合にはフランス、ベルギー、カナダ、イタリア、スペイン、スイスが加盟し、

「日本で最も美しい村」連合
長谷川常務理事

松田久会長

講演要約

アルベルゴ・ディフーズ

～新しいかたちの分散型ホテル～

■講師 イタリア・アルベルゴ・ディフーズ協会会長 ジャンカルロ・ダッラーラ氏

Giancarlo Dall' Ara
 (ジャンカルロ・ダッラーラ) 氏のプロフィール

イタリア各地や旅行業オペレーターに対して、観光マーケティングのコンサルタントを務めており、イタリア小美術館協会（APM）の会長。訪問者との関係や思い出づくりに訴えるニッチ・マーケティングを推進し、伝統に縛られることのないアプローチを提唱する。「アルベルゴ・ディフーズ」という独自のモデルを構築した後は、イタリア・アルベルゴ・ディフーズ協会を設立し会長を務める。



アルベルゴ・ディフーズとは

今回のご企画に心から感謝している。まず、アルベルゴ・ディフーズについて、2点申し上げたい。一つ目はアルベルゴ・ディフーズとは何か、もう一つはアルベルゴ・ディフーズが直面する問題についてだ。

通常のホテルは、何層にも重なった造りで、民家とは独立して建っているものだ。これに対して、アルベルゴ・ディフーズは、ホテルが離れたところに散在する。もともとあった家屋を宿泊施設として活用している。アルベルゴ・ディフーズは村内に散在しているので、旅行者は、村の生活の中に身を置くことができると言う訳だ。

つまりアルベルゴ・ディフーズは、持続可能なツーリズムの提案だ。新しく何もつくりないので、村の形状も変わらない。点在する家の一つを受付と決め、その他に宿泊場所を設ける。受付業務を14時間以上継続して行い、お客さまを迎え、宿泊場所に案内するサービス担当者も必要だ。つまりアルベルゴ・ディフーズは、人がいなくなった集落には生まれず、人がいることが前提条件だ。旅行者しかいない限界集落を訪れることはない。従来型のホテルは垂直なホテルで、アルベルゴ・ディフーズは水平なホテルだ。

アルベルゴ・ディフーズの必要条件

アルベルゴ・ディフーズの必要条件は、1人の企業家が管理するなど統一的なマネジメントだ。朝食など

ホテル基準のサービスも欠かせない。

各所に散らばっているために、確かに物理的な距離がある。このため掃除などのサービスを行うために、適正な距離を保つことが必要だ。経営上水平なホテルの問題点でもある。

しかしお客さまの目的は、集落に来ることなのだから、一年中お客さまを取り込むことができ、泊数も増えるはずだ。温暖な気候や海を求めてくる訳ではないので天候にもかかわらず、施設の良い面・悪い面も含めて、喜んでお帰りになる。

このほど日本語のガイドブックが出来上がり、イタリアのアルベルゴ・ディフーズ10数軒が紹介された。イタリアの正式登録は約90軒。周辺国では、クロアチア、スイス、スペイン、ドイツに1軒ある。忘れてならないことは、アジアで第1号が矢掛町だということだ。矢掛屋オーナー安達精治氏に感謝する。

どのように誕生するのか

アルベルゴ・ディフーズ誕生にはいくつかのケースがある。多くのケースは企業家が空き家に魅力を感じ、ホテルに改装するというものだ。なかには集落ごと買い取る場合もある。例えば、あるオランダ人建築家夫婦が、丘の上の住宅と空き家全てを買い取り、アルベルゴ・ディフーズをつくったケースがある。これにはまとまった資金が必要だ。このほかには家屋有志が協同組合に貸し出しするというものもある。

地域全体を元気に

アルベルゴ・ディフーズの原動力は何だろうか。これには地域全体が元気になり、再生する目的がある。今回の認定に当たり、仲介役の両備ホールディングスさまの企業活動を詳しく検証した。この結果、同社が地域再生にことのほか力を入れておられることを知り、お話を進められると確信した。昨年来パートナーとなった傘下のトゥッタ・イタリア様との活動に期待している。

旅行者は、滞在先でジャムやパンを買うなど消費活動をする。こうしたことが、村の元々の商業活動を促進する。雇用が生まれ、7割の仕事が地元の人が行うことができる。更なる副産物として、旅行者が空き家を気に入り、第二の古里にすることもある。

旅行者は本物を望む

アルベルゴ・ディフーズの理論と哲学については次のように考える。第一に持続可能であること、そしてネットワーク連合が求められるということだ。「日本で最も美しい村」常務理事の長谷川さんとは、日本国内の村を複数回回っている。物理的に空き家があるだけでは不十分だ。ネットワークを持ち、互いに村を魅力的にみせようと努力しなければならない。

イタリア中部ペルージャで観光について教鞭を取ってきた。そこで分かったことは、旅行者は旅をすればするほど、本物を望むということだ。アルベルゴ・ディフーズを利用する客も例外ではなく、お膳立てを望まない。オーナーは村の魅力を語り、郷土愛に満ち、おもてなしの精神にあふれていることが重要だ。従って地域の人自身が重要なキーワードになる。

おもてなしの心が成功の鍵に

失敗事例も含めて成功条件に触れたい。まず客室同士の建物が近いことが必要だ。離れすぎると、旅行者は孤立感を感じるものだ。

次にアルベルゴ・ディフーズの中には、コンサートや料理や語学教室、土地の歴史教室も開かれていることにも注目したい。ふだんの生活を体験していただくことも、旅行者にとって魅力だ。つまり、土地のルーツなどに魅力を感じる人もいることに注目するなど、マーケティングも必須で、待っていてもお客さまは訪れない。

さらにお客さまをおもてなしするのは自分自身だという自覚を一人ひとりが持つことだ。そのうえ地元の

人全員がこうした意識を持つことが大切だ。

アルベルゴ・ディフーズは、家でありながらホテルでもある。受付は、おもてなしが感じられるものであるべきだ。店や工房、オフィス、会議場、カフェも併設されるとさらに魅力が増す。

半分日本で、半分イタリア

注目したいことは、アルベルゴ・ディフーズに最も反響があるのは日本だということだ。長谷川さんのご高配で、2017年11月に東京のイタリア文化会館で500人もの聴衆の前で講演した。日本で本も発刊されている。新聞やガイドブックにも取り上げられ、とくに田舎を訪れるという目的で、アルベルゴ・ディフーズを紹介してもらっている。大学生の卒業論文のテーマにも取り上げていただいた。JTB総合研究所の書籍にも、アルベルゴ・ディフーズのコンセプトで、新潟県三条市が取り組んでいることが紹介されていた。さらに日本のアルベルゴ・ディフーズの本は台湾で中国語に訳された。

以前、アルベルゴ・ディフーズの未来を模索した時に、日本のホスピタリティを学ぼうと旅館について勉強した。高層階のホテルしか知らない私にとって、旅館がおおいにヒントになった。旅館は水平に、地元の人と協力して土地に根ざしたサービスも提供していることを知り感銘を受けた。日本流のホスピタリティにも似たアルベルゴ・ディフーズは半分日本、半分イタリアのようなものだろう。

世界的な賞の受賞などで注目

数カ月前、中国山岳地帯にある貴州省の小さな町を訪れた。そこで将来、アルベルゴ・ディフーズになりうる集落を見つけその場で公文書を交わした。

また、独ジャーナリストが取材し、再生を果たした16の限界集落が取り上げられた。そのキーワードは分散型のホテル (the scattered hotels) だ。このうちイタリアは4軒のみで残り12軒は世界のその他の地域だった。ただし、英語の scattered (散らばった) は、アルベルゴ・ディフーズの意味とは異なると感じている。

アルベルゴ・ディフーズは、100軒ばかりしかないが、世界のメディアに取り上げられることも多い。英国紙やニューヨーク・タイムズ紙で反響を呼んで、世界から注目された。2010年ロンドンで開かれた世界最大の見本市「ワールドトラベルマーケット」でグローバル

賞も受賞した。

アルベルゴ・ディフーズとは何か―。これは地域の再生を目指すものだというを皆さまにご理解をいただけたと思う。今後はアルベルゴ・ディフーズの宿泊形態が広がっていくと確信している。

質疑応答

Q1 岡山大学の教員

大学や高校などの教育機関で、アルベルゴ・ディフーズを応援し学びたい。どのような点で関わることができるのか、アイデアをいただきたい。矢掛町では留学生がホームステイをさせていただき、心から感謝している。

A1 ダッラーラ氏

自らが地域に行き、良い点と問題点を知ることが第一歩。たとえば地域のどのレストランが生き残れ、どの点が手を加えられるべきなのか、アセスメントし支援する。「い(活)きている場所」が多ければ多いほど、旅行者は喜ぶものだ。地元の人がガイドとなり、地元のもの美味しさや魅力のスポットについて語り合えることが、旅行者にとって最良の思い出に繋がるからだ。

Q2 古市大蔵EU協会理事

日本人旅行者はメジャーで、最上のおもてなしを求めてしまうところがある。アルベルゴ・ディフーズでは、食事のグレードや侵入者などセキュリティ面ではどう取り組んでおられるのか。

A2 ダッラーラ氏

セキュリティが問題になった事例は今のところはない。城壁に囲まれるなど、治安のよい小さな村で鍵をかけないで暮らす人もいる。私自身も、小さな村にメーキングのない家屋に住んでいるが全く問題ない。

Q3 フロアーから

取り組みたい街が多いが、まだまだ道半ばでアドバイスを受ける機会がほしい。あるいは自治体が大学と組み、大学側のリサーチ力を活用することがいいのだろうか。

A3 ダッラーラ氏

私は直接、海外に行くことはない。イタリア国内では、私が直接村にお話に向い、地元の人がその気になれば始まる。村の方に俯瞰していただき、何もしないと課題は進むばかりであることをご理解いただく。資

金は大きいものはいらないが、受付となりうる施設のアイデアをお持ちの場合は、そこから何かが始まる。地元の危機を聞きつけた、都会の子や孫が一肌脱ぐことも想像される。

日本人の中には、地元は何もないことや外から来る人たちとの接し方が分からないという人もいるだろう。しかし外国人から見ると、日本のおもてなし、とくに旅館のおもてなしが素晴らしいと感じる。倉敷の女将がしてくださったお辞儀や食事場所にそっと置かれた小さな贈り物とポストカードが印象に残っている。

A3 長谷川昭憲「日本で最も美しい村」連合 常務理事

年内にアルベルゴ・ディフーズ・ジャパンを立ち上げ、日本で審査できる人材を育成する見通しだ。その際、松田さまら関係者の皆さまと考えて進めていきたい。

Q4 松田久EU協会会長

アルベルゴ・ディフーズと民泊やB&B（英: bed and breakfast）の違いは。

A4 ダッラーラ氏

民泊やB&Bとの違いは、客のために使う施設が独立していることだ。オーナーの生活の場と同一の建物ではいけない。サービスを提供するところが散在し将来、統一するコンセプトが見いだされるならば、アルベルゴ・ディフーズと言えるだろう。民泊は、土地の良さを感じられるものでなく、ネットワークが構築されていない。

Q5 イタリア人女性

アルベルゴ・ディフーズ同士のネットワークはあるのか。

A5 ダッラーラ氏

日本こそが今後、外へ向けるネットワークに役割を果たす。矢掛町がネットワークの起点となるだろう。理念を広めるだけでなく、客が行き来することでも広がっていくだろう。

Q6 岡山理科大学教員（文化財専門）

「旅人は本物を求める」というダッラーラ先生のお話に、文化財という建物の本物を追求する立場として関心を持った。先生にとって本物の定義は何か。

A6 ダッラーラ氏

私が考える本物には、アイデンティティが残ってい

ることを指す。これまで15カ所日本の村を訪れた。そこで地元のお茶や茶菓子を振る舞われるなどした。これらは、そこでしか手に入れない本物を貰ったものだ。新たに作るのではなく、コンフォートを追求しつつも、本物の人は心で応えるものだ。

槇野博史岡山大学学長のコメント

日本のおもてなしの再認識に加え、民宿との違いが分かった。香川県直島町の直島には邸宅を改築した民泊施設が盛んだと聞いた。日本の新しい方向性だと考える。

矢掛屋社長・安達精治氏のあいさつ

岡山にアルベルゴ・ディフーズが誕生した。東京から岡山に来て5年。岡山はお客さまに求められていると感じていた。ダッラーラ先生のお話は貴重なお話だった上に、先生の思いは矢掛屋の理念と同じだと感じた。矢掛屋を経営するのは、世界に矢掛を発信したいという強い思いがある。普段してきたことは、誰も

していないことだ。町民と一緒に考えることは大変なことだ。出ていけと言われて2年間、涙があふれることもあった。そんな時に「社長一緒に頑張ろう」と地域の奥さまが支えてくださった。岡山が良くなるために、自分のできることで何なりとしたい。岡山から発信していきたい。

閉会あいさつ 松田正己岡山経済同友会代表幹事

アルベルゴ・ディフーズの概念がよくわかった。岡山経済同友会は今年度、SDGs（持続可能な開発目標）に取り組んでいるが、アルベルゴ・ディフーズは持続可能なツーリズムと聞いて高い関心を持った。人口の少ない地域を持続するために重要な概念だ。アルベルゴ・ディフーズでは集落全体を宿泊施設とするのだが、年間どのくらいの人が集まればいいのか、などと考えた。それにしても、地域の人と一緒に進めていこうとすることが大切なようだ。岡山から全国に、そしてアジアに発信して行きたいものだ。



第19回 EU 講座

岡山商科大学松浦美佐子准教授 ～16世紀から21世紀へ「ヴェニス商人」が伝えるもの

第19回 EU 講座が10月20日、岡山市中区の岡山プラザホテルで開かれ、会員ら約20人が岡山商科大の松浦美佐子准教授による「16世紀から21世紀へ『ヴェニス商人』が伝えるもの」と題した講演に耳を傾けた。

松田久会長が「シェイクスピアの中でもテーマは『ヴェニス商人』ということで、興味深い話を楽しみにしている」とあいさつし、イギリスの劇作家シェイクスピアの言語を基にした英語学を研究する松浦氏の経歴を紹介。講演に移り、松浦氏は昨年、没後400年を迎えたシェイクスピアについて、イギリスではビジネスやファッションなど多様な場面に劇中のシーンや衣装、言葉が使われており「作品が生活の中に深く溶け込んでいる」ことを紹介した。

続いて、ヴェニス商人が執筆された16世紀末のイギリスについて「人口急増による躍進」「国際交易の後進国としての劣等感」といった時代背景を踏まえながら、ルネッサンス期のイタリアを舞台にした作品で



シェイクスピアの「ヴェニス商人」をテーマに行われた EU 講座

は「国際交易の広がり、商業で利得をあげることをよしとする新たな経済システムへの変化により、封建的な階級制度が崩れ、身分の流動化が進んだ時代を描いている」と指摘。さらに、シェイクスピアが作中で取り上げた「国際交易による世界の拡大」といった当時の社会問題を「宇宙やナノへの広がり」「イスラム国など異文化圏の台頭」などの形で21世紀へ置き換え、「400年前のシェイクスピアの作品との共通点を見ることが、現代の生き方のヒントになる」と締めくくった。



あいさつする松田久会長



「シェイクスピア作品は生き方のヒントになる」と話した松浦氏

第20回 EU 講座

アーティスト 中澤大輔氏 「10年後の街を実験する—ヨーロッパの事例から考察する、都市とアートの可能性」

第20回 EU 講座が1月16日（火）、岡山市北区のVIA PACE（ヴィア パーチェ）であり、会員ら約30人がアーティスト中澤大輔氏＝東京在住＝による「10年後の街を実験する—ヨーロッパの事例から考察する、都市とアートの可能性」と題した講演を聴き、その後も熱心な質疑応答があった。

中澤氏は1980年生まれ。慶応大を経て英国ロンドン芸術大大学院修了。アートおよび演劇活動の傍ら昨年まで10年間、電通（東京）に勤務した。現在はアートとデザインの両分野で多彩な活動を展開し「アートは問いかけであり、デザインとは答え。両方やることで、両方から学びがある」。講座では冒頭、松田久会長が「いつものホテルとはスタイルを変え、西川緑道公園沿いのイタリア料理店での講座が実現した。中澤さんの肩書にアーティスト、デザイナーに加え『エクスプローラー』（explorer）とあったが、街を歩きながら何かを探す“探検家”ということだろうか。20回目の節目にふさわしい講師に来岡いただいた」と挨拶。中澤氏は、東京の渋谷駅構内でヘッドホンをつけて歩くと駅で働く人たちの物語が聞こえる自らの体験型作品「Passage Tells: Shibuya」や2014年から高松市仏生山町で継続的に開催している住民参加型の演劇まちあるき「パラダイス仏生山」について、「場所・人・モノの背後にある物語に耳を傾けることで、都会でも地



アーティストの中澤大輔氏

方でも、人は優しい気持ちになれるのでは」と作品意図を説明した。

続いて、昨夏に開催された世界的な3つの国際芸術祭①ヴェネツィアビエンナーレ（伊ヴェネツィア；1895年初開催・2年に1度）②ドクメンタ（独カッセル；1955年・5年に1度）③ミュンスター彫刻プロジェクト（独ミュンスター；1977年・10年に1度）について、現地で撮影した写真を映写しながら歴史や特徴、中心的ディレクター、功罪などを説いた。出展単位が国の①について「“美術のオリンピック”と称され、人口6万人の島に毎日20万人の観光客がやって来る。生活者の姿がなく、現実にはないウソの世界が芸術祭期



熱心な質疑応答…その後は西川のイルミネーションをバックにイタリアンディナー

間中に出現する点で“ディズニーファイ”との批判もある」とし、旧ドイツ東西ベルリン国境付近で開かれる②は「金にまみれた①に代わる世界最大の現代美術展との評価の一方、芸術祭自体が基幹産業になってカッセルという古都の名が『ドクメンタ・シティ』に変わろうとしている」と現状報告。③については「10年に1度という間隔が、彫刻表現の動向を観察し、社会との距離を保つ上でもちょうどいいのかもしれない」とした。

講座に先立って訪れた大原美術館（倉敷市）でアンリ・ル・シネダル作「夕暮の卓」（1921年作）が修

学旅行の男子高校生に人気という話を聞いたことを紹介。「屋外でワインや紅茶を飲む夫婦の時間にあこがれるそうだ。40年前、高度経済成長時代の男子高校生は、そんな反応をしなかつただろう」と指摘した上で瀬戸内国際芸術祭（2010年・3年に1度）、岡山芸術交流（2016年・3年に1度）について「アートは時代という文脈や場所、鑑賞者の解釈から逃れることはできない。現代はヨーロッパなら移民、日本なら人口減少という問題があり、これからの地域の在り方を巡る議論があって初めて、アートが岡山に何かをもたらす力になる」と締めくくった。

第21回 EU 講座

岡山大学大学院社会文化科学研究科教授 中谷文美氏(文化人類学) 「仕事は人生の中心じゃない？ オランダ流の働き方・暮らし方」

第21回 EU 講座が5月21日、岡山市北区の VIA PACEであり、岡山大の国際化を推進するグローバル・ディスカバリー・プログラム担当の前副学長で、同大学院社会文化科学研究科教授（文化人類学）を務める中谷文美^{あやみ}さんの講演「仕事は人生の中心じゃない？ オランダ流の働き方・暮らし方」を約40人が聴いた。中谷さんは「ワークとライフは対立するものではなく、大切なのはコンビニエント（組み合わせ）。仕事と家庭の両立を同じ文脈でとらえて」と説き、日本の現状について会員と熱心に意見交換した。

中谷さんは1963年、山口県下関市生まれ。上智大外国語学部フランス語学科卒。京葉教育文化センター

（千葉県）に3年間勤務した後、英国に留学しオックスフォード大大学院博士課程を修了した。岡山大専任講師、京都大併任助教授などを経て現職。著書に「オランダ流ワーク・ライフ・バランス—『人生のラッシュアワー』を生き抜く人々の技法」などがある。

「世界が激動していた1980年代を国や経済をベースとしない庶民の視点でとらえたかった」ことが、文化人類学を学ぶために英国留学した動機という中谷さん。インドネシア・バリ島の山中の村で民泊しながら研究した成果を論文にまとめるため「文献が豊富にある旧宗主国のオランダに、同じ研究者の夫、長男とともに長期滞在したことがきっかけでオランダにおける



オランダのワーク・ライフ・バランスについて現地の写真や資料を映しながら説明する中谷文美教授



日本の現状について会員と熱心に意見交換

ワーク・ライフ・バランスが研究テーマの一つになった」と振り返る。

仕事、家庭、地域のバランスについての日本との比較では「家庭優先を希望する人が多い日本の30代男性も現実は仕事優先になっているが、オランダは希望する労働時間と実際の差がない」と指摘。1日8時間・週36時間労働が基本になっているオランダは「だれも残業する人がいないから、1日1時間残業して『9時間×4日=36時間』にすれば土・日以外に週休を1日増やすという理屈が現実として成り立つ」と紹介した。

1960年代後半から働く女性の割合が増え、現在は20～49歳代で80%を超えていることについて、同一職種・同一労働という原則の下、パートタイム労働とフルタイム労働との均等処遇を原則とする労働時間差別禁止法(1996年)、パートとフルを従業員の方が選択できる労働時間調整法(2000年)などの公的制度が後押し。「主婦として家庭に入った女性がパートで働くようになり、フルからパートや在宅勤務に働き方を転換して働き続ける女性も増えた」と背景を説明した。

現在、議論されている日本の働き方改革について「法案では働き方改革がパッケージになっているが、個々の状況に応じて改革のメッセージが一人一人に届くようになっていないことが問題。結婚～第1子誕生～第2子誕生～子ども就学というライフステージの変化に応じて働き方(場所、時間)を柔軟に変えられるように、個人を支える制度の存在が重要」とし、「生活は多様なパーツの組み合わせから成り立っており、組み合わせのパーツや方法は各人各様に決めるべきもの。ライフステージ、家族の状況、周囲との関わりなどに

応じて修整しながら暮らせるワーク・ライフ・バランスを目指さなくては」と講演を締めくくった。

*** 質疑応答 ***

①オランダで1960年代後半から女性が働く割合が増えていった理由は?

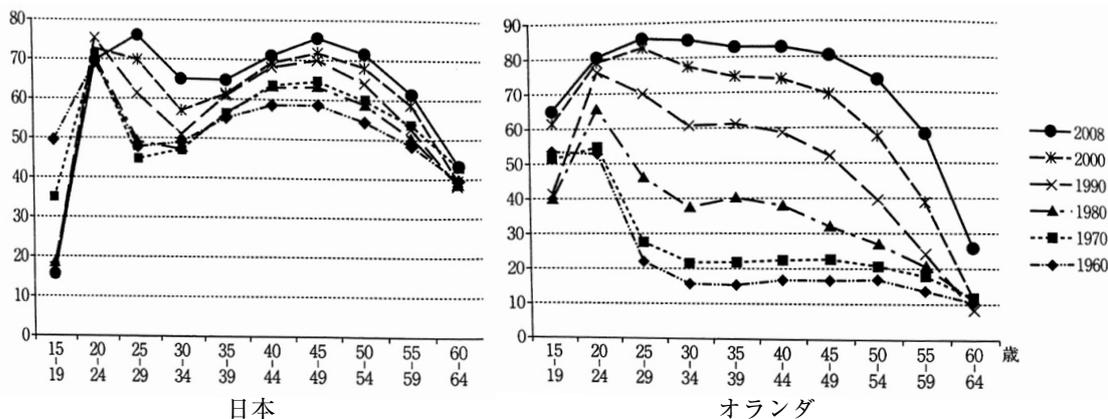
「子どもを持った女性は主婦として家に入るべきという宗教的な“拘束”(プロテスタントの理想)が緩み始め、そこへ産業構造の変化によりサービス業の割合が高くなって労働力が不足する中、働く意欲を持つ主婦が増えるという複合的な要因によって需要と供給がマッチした」

②日本の現状をどう見るか?

「法律が駄目というより、法律が守られていない現状がある。『なぜ女性が実力を発揮できる社会にならないのか』と女性自身、夫、そして上司が本気で考えなくてはいけない。オランダでは少子高齢化、労働力不足の中、1980～90年代に女性と高齢者を労働力として活用する法律が整備され、制度改革により労働市場が生まれた」

③オランダの労働生産性が高い理由は?

「長時間労働者比率の国際比較でオランダは最短だが、一人当たりの労働生産性は北欧に次いで高い。一方、日本は労働時間は最長だが生産性は下位。日本人から見るとオランダ人の働き方はヌルイように見えるかもしれないが、切り替えがうまい。『知識基盤型社会』に移行しているのだから、長く働けば成果が出る時代は終わったと考え、勤務時間外で自らのスキルアップを心掛けている」



女性の年齢段階別労働力率の経年変化(日本とオランダ：1960～2008)

コラム

ヨーロッパ人にとってのバカンスとは

白神 三津恵

EUSTIM 代表。1998年からオランダに移住。理学博士の夫とともに EUSTIM を立ち上げて、日欧間の食品及び医科学関係のコンサルタント業務に携わり、食品分野を担当している。日欧間で食品分野における新商品の紹介や企業間の架け橋、工場や農業視察のアレンジや通訳等も行っている。



皆様、はじめまして。オランダで食品コンサルタント業務に携わっている白神三津恵と申します。よろしくお祈いします。

ヨーロッパ企業との取引で、5月から9月ぐらいにかけてヨーロッパ企業側からの連絡が遅れたり、注文したものがキチンと届かなかったりという経験はございませんか？ それは全てバカンスのせいでしょう。ヨーロッパ人はバカンス時期に交代で仕事を休むのですが、引継ぎがうまく出来ていない状態でのバカンス突入が多いことが原因です。問い合わせでも「担当者が今バカンス中で…」と言う回答がまかり通るんですよ。ドイツやオランダでは、バカンスの時期に、一斉に国民が移動するために起こる渋滞を避ける為、国が地域によってバカンスの開始時期をずらしている事でも、重要性がお解りいただけるとと思います。



オランダ ザーンセ・スカンス

バカンスの過ごし方

さて肝心のバカンスですが、ヨーロッパ人はどのように過ごすのでしょうか？ キャンピングカーや車で出かけることの多いバカンスの時期は、各国の高速道路を実に様々な国のナンバープレートが走っています。見るだけでも楽しいですよ。車で行くバカンスの行き先で多いのは、やはりキャンプ場。自宅からテントを持参する人もあれば、既に出来上がったテントを借りることもあります。また、バンガローパークやバケーションハウスなども人気です。現地についたら、居住空間の環境を整えて、あとはひたすらゆっくり。観光は二の次です。

バカンスの目的は、通常的环境から離れてとにかくゆっくりする事。一日中本を読む人もいれば、一日泳いだり、ボーとしたり。子供がいる場合は、子供と一日中遊んだりして過ごします。普段の生活で出来ない事をして、多忙な日々からの解放感を味わいしっかりと充電。はたまた近くの街を訪れたりして、時間に追われずゆっくり観光や食事を楽しむ。これが一般的なヨーロッパのバカンスの過ごし方です。

バカンスの背景

ヨーロッパ人のバカンスは必須行事。クリスマスと同じくらいに重要な行事です。たとえどこにも行かなくても、皆さんきっちりお休みします。これは全労働者に与えられた権利。オランダの場合は、バカンス休暇用の

ボーナスが休暇前に従業員に配られます。このボーナスは給料の約1カ月分ぐらいが相場のようなのです。もちろんこのお金は、使い方は自由ですがほとんどの人は、このボーナスでバカンスを楽しむようですね。バカンスの間に、ゆっくり心と体を休めて次のバカンスという楽しみまで頑張っておく。逆に言えば、バカンスという非日常的な楽しみがあるから仕事を頑張れる。事実、今年のバカンスは終了したばかりですが、皆さん来年のバカンスの予定をたて始めています！



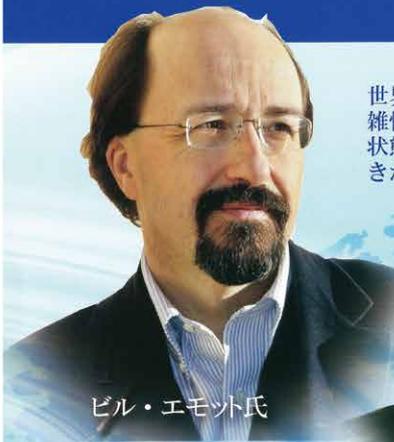
スペイン メノルカ島

Think Globally, Act Locally
就実グローバル・フォーラム 2018



VUCA 世界における日本の選択

～EU、アメリカ、アジアの視点から～



ビル・エモット氏



グレン・S・フクシマ氏



出井 伸之氏



杉山 慎策

世界はいま Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の4つのキーワードで示される VUCA 状態にある。この混迷の中で世界はどう動き、日本はいかに対応すべきか、英米日を代表する識者に論じていただく。

日時 11/3 Sat
13:00 ~ 17:00

場所 就実大学 S館102
110周年記念ホール

ご参加申込みは web「こくらーず」から
<https://bookhouse.com/event/index/33329W>

参加自由
入場無料



主催：就実大学
共催：岡山 EU 協会、岡山県中小企業団体中央会
後援：岡山県経済団体連絡協議会、岡山県商工会議所連合会、岡山県経営者協会、(一社)岡山経済同友会、岡山県商工会連合会
就実大学経営学会

基調講演

ビル・エモット氏
(元英エコノミスト誌編集長・就実大学客員教授)
「VUCA 世界～EU・BREXITの視点～」

グレン・S・フクシマ氏
(元在日米商工会議所会頭・京都大学客員教授)
「VUCA 世界～アメリカの視点～」

出井 伸之氏 (就実大学特任教授・元ソニー(株)会長
クオンタムリープ(株)代表取締役 ファウンダー & CEO)
「VUCA 世界～日本・アジアの視点～」

パネルディスカッション

ビル・エモット氏、グレン・S・フクシマ氏、出井伸之氏
コーディネーター：杉山慎策
(就実大学副学長・経営学部長)

通訳：小笠原ヒロ子

就実大学と共催で上記フォーラムを開催します。奮ってご参加ください。

第22回 EU 講座のご案内

- 日時 2018年11月2日(金) 10:00～12:30頃
 - 会場 ANA クラウンプラザホテル岡山「曲水の間」
(岡山市北区駅元町15-1 tel.086-898-2370)
 - 講師 近藤 道雄氏 国立研究開発法人産業技術総合研究所
福島再生可能エネルギー研究所上席イノベーションコーディネータ
 - テーマ EUのエネルギー政策・環境対策
- ※同友会と合同で開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

岡山EU協会 事務局

〒700-0985 岡山市北区厚生町3-1-15
岡山商工会議所ビル5階
(一社)岡山経済同友会内

T E L : 086-222-0051
F A X : 086-222-3920
E-mail : info@okayama-eu.jp
U R L : http://okayama-eu.jp